

1. 《SAND9》

堺の砂浜を掘ったところに石膏を流し込み、自分では意図しない造形が生まれることを発見した SAND シリーズのうちのひとつ。この作品群で、1958年白鳳画廊で初個展を開く。当時、彫刻作品に偶然性を取り入れたことや、短期間で完成する作品はいかにも”彫刻らしくない”ために、初個展にして注目を集めた。

2. 《何をしても仕様がなない・7月(裏の小山)》
3. 《何もしたくない・7月(時鳥)》
4. 《何をしたいのか分からない・7月(額紫陽花)》
5. 《何もすることがない・7月(KUSAMA)》

1998年から制作を始めた、平面上のFRPに電動彫刻機でひたすらに文字を彫るシリーズ。「何もすることがない」という言葉は、60年代から繰り返し作品にも登場している。この4点には、アトリエ近くの山や、庭の草花、草間彌生展を見た感想などが描かれており、日記のように身の回りのものを題材にする福岡の作品の特徴が表れている。

6. 《逃した鮎 45センチ》

河内長野市内にアトリエを構えた70年代より、制作の合間にヘラ鮎釣りに没頭するようになる。池から持ち帰った鮎を自宅の水槽で飼育するも、鮎たちが自傷行為を繰り返し人間に怯えるその姿に、かつて60年代あらゆるものに反抗しながら、健康を犠牲にしても作品を制作していた自身の姿を重ねるエピソードにもつながる作品。

7. 《反》

「反」と彫られた石が波に乗り、その波は岩の断片のように粗く削れている。波の時代が終わり、文字への変遷を感じさせる作品。制作を始めた50-60年代、社会に対する不満や疑念が若者たちを動かした。その渦中で彫刻家としてどうあるべきか、「ただひたすら『反』という字を頭に彫刻を作ってきた」と言う福岡の一貫した制作への態度表明である。

8. 《怒る蚯蚓》

9. 《笑うミミズ》

庭の草むしりをしていて土から現れるミミズを題材にした作品。ミミズは雌雄同体で、他の生物に危害を加えることなく、土壌生態系を支える重要な存在である。そのミミズたちが乗っているのは《腐ったきんたま》だ。人間本位なシステムを突き詰めた結果、格差や気候変動が加速的に進行している私たちの社会は、ミミズたちからどう見えているのだろうか。

10. 《つぶ》

2005年の個展を最後に「つくらない彫刻家」を宣言した後に制作された。60年代に小さなマルだけを描いたドロ잉からつながる、ただ純粋に手を動かすために生まれた作品。彫刻家として男性性を否定する作品を作り続けた福岡は、ついに《腐ったきんたま》を小さな《つぶ》にしてしまった。

11. 《マサンダ池》

70年代から、制作の合間に没頭していた鮎釣りから着想を得て、日記のように風景を写し取る彫刻のシリーズを約20年展開していく。この作品では河内長野市内のアトリエ近くの野池の名前が取られているが、4つに分かれた池は実際の池の形を模しておらず、心象風景としての波が表れている。

12. 《ブラックバルーン》

何者にもなれない、何もできない私たちが「はあ」とついたため息が、ぶかぶか漂っている。かつてピンク色のバルーンを作っていた60年代を振り返り、現代に「全く異質な不安と危惧を感じ」制作された《ブラックバルーン》には、こんな言葉が刻まれている。

「このブラックバルーンの文字を刻む仕事もこれで終わりになる。三個のブラックバルーンに文字「何もすることがない」と刻んだのであるが、なんと長い時間を通ってきた様に感じる。その間ずっと腹立たしく苛々していた。それでも文字を間違えない様につけてきたが時々横に走ってしまう。六十年代のピンクバルーンを打ち上げて以来、このブラックバルーンを今頃上げねばならなくなるとは夢にも思わなかった。なんと皮肉なことがあるものだ。悲しくなる。正に絶望的である。ブラックバルーンを上げねば良かった(ママ)と思う時が、いつの日かあるのだろうか。いや、それまで僕は生きてはいまい。ピンクバルーンには夢があったのだ絶望の中にかすかな明りが見えた。しかしこのブラックバルーンにはそれが全く無い。やりきれないものである。」



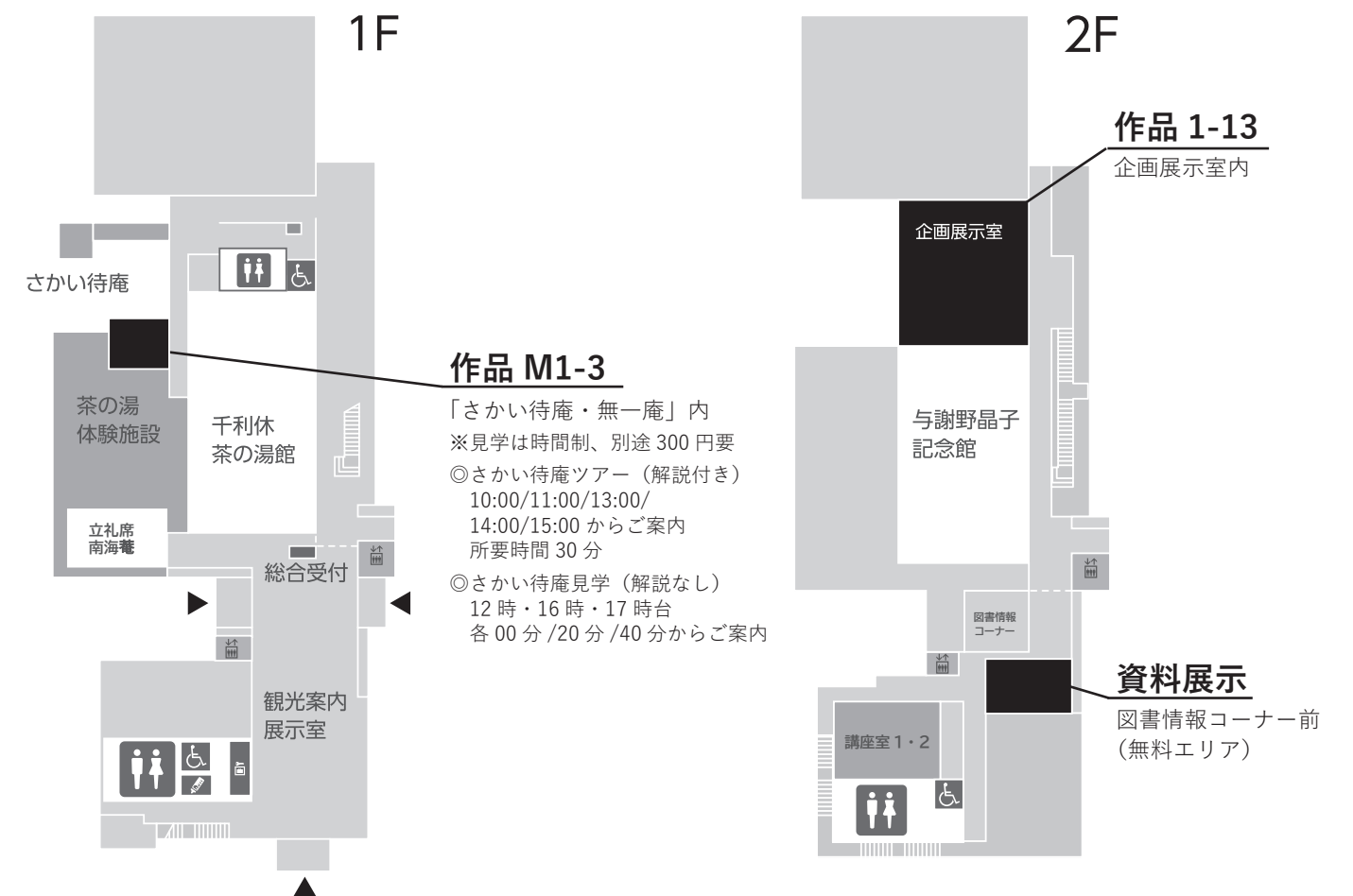
福岡道雄 静かな前衛



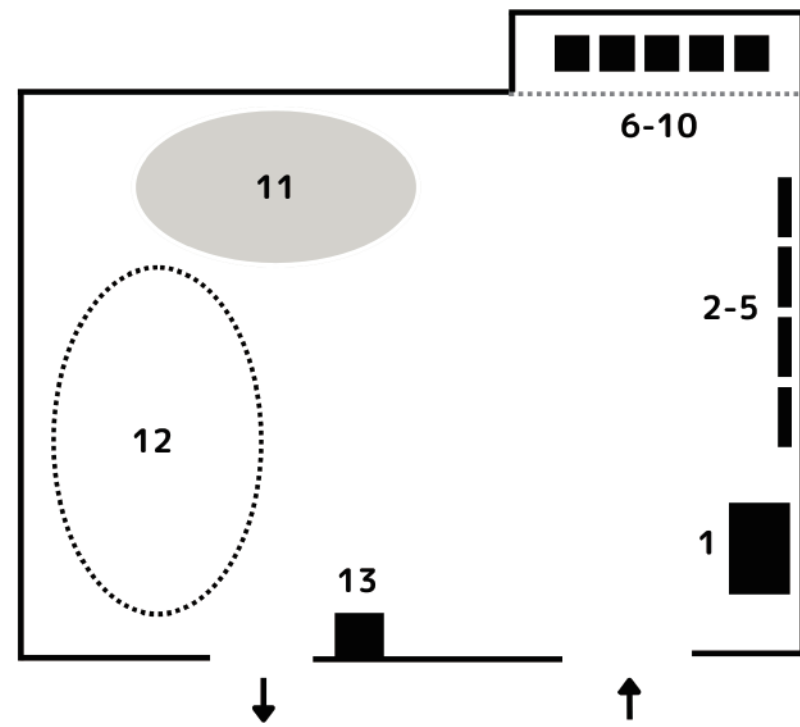
2024年
7月6日[土] - 9月1日[日]

会場 さかい利晶の杜 2F企画展示室+「さかい待庵・無一庵」
時間 9:00 - 18:00(最終入館17:30)
休館日 7月16日、8月20日
主催 堺市立歴史文化にぎわいプラザ さかい利晶の杜
指定管理者 SAKAI縁プロジェクト
協力 堺市

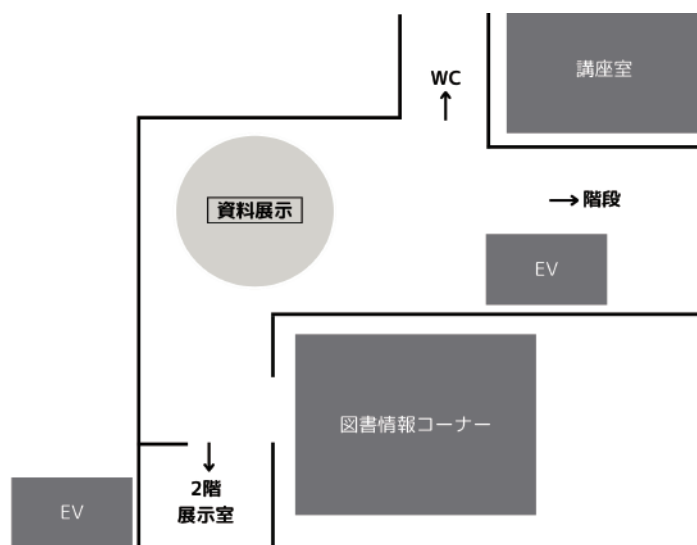
館内作品設置場所



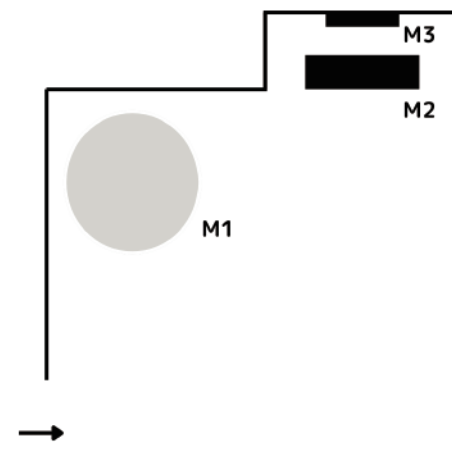
2F 企画展示室



2F 図書情報コーナー前



1F さかい待庵・無一庵



- | | |
|--|--|
| <p>1.《SAND9》
“SAND9”
1957
石膏・砂・紅殻・墨採色
35×87×25
堺市</p> <p>2.《何をしても仕様がなない・7月(裏の小山)》
“It Doesn't Matter What I Do : July (Behind the Hill)”
1999
FRP・木
90.5×92.0
ギャラリーヤマキファインアート(寄託)</p> <p>3.《何もしたくない・7月(時鳥)》
“I Don't Feel Like Doing Anything : July (Lesser Cuckoo)”
1999
FRP・木
90.5×92.0
ギャラリーヤマキファインアート(寄託)</p> <p>4.《何をしたいのか分からない・7月(額紫陽花)》
“I Don't Know What to Do : July (Lacecap Hydrangea)”
1999
FRP・木
90.5×92.0
ギャラリーヤマキファインアート(寄託)</p> <p>5.《何もすることがない・7月(KUSAMA)》
“I Don't Have Anything to Do : July (KUSAMA)”
1999
FRP・木
90.5×92.0
ギャラリーヤマキファインアート(寄託)</p> <p>6.《逃した鮒45センチ》
“The Crucian Carp I Missed Was 45 cm.”
1987
ブロンズ、台座にドローイング
17×45×9
(台座40×50×13.2)
個人</p> <p>7.《反》
“Opposition”
1996
FRP
18.5×34×20.5
個人</p> <p>8.《怒る蚯蚓》
“Angry Earthworm”
2005
FRP
12×16×9.5
個人</p> <p>9.《笑うミミズ》
“Laughing Earthworm”
2005
FRP
12×16×11
個人</p> | <p>10.《つぶ》
“Seeds”
2012
FRP
1.5×1.5×1.5
ギャラリーヤマキファインアート(寄託)</p> <p>11.《マサンダ池》
“Masanda Pond”
1991
FRP・木
サイズ可変
堺市</p> <p>12.《ブラックバルーン》
“Black Balloon”
2002
FRP・ロープ
サイズ可変
作家</p> <p>13.「遠いメモ、近いメモー
つくらない彫刻家は前衛であるか？」
“Memo ; Is a Sculptor Who Does Not Make
Anything Avant-Garde?”
不明
紙
12.7×18.8(四六判単行本)
個人</p> <hr/> <p>資料展示(映像)
「アントルポットの放課後『福岡道雄の仕事と
今村源の仕事—1950年代から2000年代へ』」
ダイジェスト版
収録 2004年/ 編集 2024年
19分17秒
個人</p> <hr/> <p>M1. 茶箱 (Tea Serving Box)
2008
FRP・木
24.5×14.5×11.5
個人</p> <p>M2. 木箱 (Box for tea bowl)
2008
木
37.7 × 37.7 × 19.2
西宮市大谷記念美術館</p> <p>M3. 《夏のつぶ》
“Seeds of Summer”
不明
紙、鉛筆、水彩絵の具
26.5×19.5
個人</p> |
|--|--|